
スターウォーズ クローン・ウォーズ とある戦術ドロイドの一生...？

トッキー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スターウォーズ クローン・ウォーズ とある戦術ドロイドの一生…？

【Nコード】

N8349U

【作者名】

トッキー

【あらすじ】

ある日突然、テンプレの如くトラックに轢かれて死亡した俺。目の前に現れた神様(?)を色々と弄ったりしたが、それが問題だったらしい。転生した迄は良いが、まさかのあのキャラになってしまったとは…!!どうする?どうすれば良いの俺!?つづく!!

プロローグ1（前書き）

初めまして、トッキーという者です。

今回、前から考えていたネタを投稿させてもらいました。感想の他に時系列等、可笑しい点が御座いましたら容赦なく突っ込んで頂いて結構です。

諸注意：作者の文才は限りなく低いので、色々とお気を付け下さい。
ではノシ

プロローグ1

突然だが、俺は転生者だ。

…今「こいつ頭おかしいんじゃない？」って思った奴いるか？

安心しろ、多分俺もそう思うから。

いや、別に妄想とか中二病とかじゃなくて、結構マジモンで転生者なんだよね俺って…。

何か普通に道歩いてたら、テンプレの如くトラックに轢かれて、したら白い空間にいて幼女っぽい神様が目の前にいたんだよね。話聞いてみたら、案の定「間違って殺してしまった」との事…。

最初それ聞いた時は、怒りのあまりアイアンクローかまそうと思っただけど、涙目で上目遣いしながら謝るのを見て、そんな思いも吹き飛びましたよ…。

そして思いつき抱きしめた上に、頬擦りやら頭撫でたりやらもうイロイロとしまくったせいか、話する段階じゃもうへロへロのフニャフニャになってた訳だ。

……今にして思えば、これがいけなかったんだろうなあ、ハハハッ…。
(物凄い遠い目)

へロへロ状態で「どうしたいんでしょか？」と聞かれた時に、思わず「スターウォーズで無双したい」って答えちゃったんだよね。

何だよ！！スターウォーズ好きなんだよ、文句あるかよ、コラ！？

「魔法少女リリカルなのは」とか「インフィニット・ストラトス」とか、二次創作でよく見るけど本当は内容あんまり知らないんだよ、悪いかよ!!!?

まあそれは置いて、転生したんだけどさ…。

そりゃ確かに「スターウオーズで無双したい」というように頼んだよ…。

でもさ、普通だったらジェダイになるとか、反乱同盟軍に入っテルークと肩並べたりとか、帝国入ッてあわよくば艦隊指揮したり出来ると思ったりするじゃん？

若しくはクローン戦争時代に行ッて似たような事を想像して、胸膨らませたりとかするじゃん？

だけど、だけどな…!!

なんでTシリーズ戦術ドロイドなんかになつてんだよ俺はよおお
おおおおおおおおお!!!!!!???

プロローグ2（前書き）

続きました！！

ブローグ2

クローン戦争時代に転生するのはまだいい。分離主義勢力側に付いたのもまだ許せる。

でも普通だったら、ここでドゥークー伯爵とかの兄弟弟子とか分離主義者の誰かに転生するとか考えるやん！？

なんでよりによって、あのかませ犬的な河童ドロイドに生まれ変わるかなあオイ！！？

もしかしてあのロリっ子バ神、「無双したい」っていうのを「戦術無双」なんて思ったりしたんじゃないかなー！！？どんな思考してんだ！？

…あ、でもよく考えたら、俺がへロへロ状態にしたのと浮かれてキヤラとか時代設定しなかったのが大きな原因かもしれんな。(100%それが原因です)

でも、なっちまったもんは仕方が無い。せいぜい共和国やジェダイ、あとグリーンヴァス将軍とかに破壊されないよう気を付けないと…。

え、ジェダイや共和国は分かるけど、なんでそこでグリーンヴァス将軍が出て来るのかって？

……だってあの人(？)、気に入らない事があると平気で他のドロイド壊すんだもん…。この間もヘマしたB1バトル・ドロイドを裏拳で破壊してたし…。

「貴様、そこで何をやっておるか！さっさと持ち場に戻れ！！壊されたいのか！！！」

やべっ、グリーヴァス將軍！！

「モウシワケアリマセン、ショウグン。タダチニ、モチバニモドリマス」

まあそんなこんなで敵味方両方から日々怯えつつも過ごしたりします…。

「ふん、間抜けのブリキドロイドが！」

こ、このサイボーグ野郎…！いつか殺してやる…！

…うん、無理だな。共和国に居場所リークして代わりに倒してもらおうかな？

はあ、これからどうなる事やら…。

にしても喋りにくいな。今度会話プログラム、こっそり弄ってみるかな？

設定（前書き）

今回は、物語の中心となる（予定を立てている）我らが主人公の紹介です。

設定

・T O - K K 1 (ティオー・ケーケーワン)

この物語の中心となる人物(?)。

前世は大学に通う典型的な日本人であり、また本人は否定しているが若干オタクが入っており、二次創作物のネット小説をよく目にしたりしていた。

その割に、その作品のオリジナルの内容となると、住んでいた所にチャンネルが入らなかったり、小説等もお金があまりなく買えなかったり等で全く知らなかったりする。

そして転生する際に、うっかりミスで自分を殺した神を一目見て、イロイロと弄くり、転生出来ると浮かれていた結果、物の見事にTシリーズ戦術ドロイドに転生する事となってしまった。

この世界に転生してからは、ボディ自体は典型的なTシリーズ戦術ドロイドのだが、性格は本人がへたれチキンな為に、元来の傲慢で短気、そして自分本位な性格の他の戦術ドロイドとは大きく異なっている。

ボディはブルーで塗装され、左胸には独立星系連合のシンボルマークである六角形が描かれている。

そして「折角の機械の体だから」と、本人は自分の体を魔改造する気マンマンでいる。

なお余談だが、もう既に会話プログラムを弄っていたりする。これは本来備わっていた会話プログラムが話しづらく、本人が嫌がった為である。

（決して作者が読みづらかった為ではないので悪しからず）

分離主義勢力の本部で様々な補佐等を行っている内に、シディアス卿にもその功績が認められ、分離主義評議会内でも発言力を持つ等、相当の権力を持つ將軍の位置に居たりする。

（具体的に言えば、コルサント侵攻に必要な艦隊の半分に命令を下せる程）

しかし、その事を本人は全く知らない。

にも関わらず、激昂すると他の提督や將軍の頭越しに部隊に命令したりしている。

そして、その度に破壊されないかと内心ビクビクしている。

また他の戦術ドロイドとは違い、八つ当たり等しない為に他のドロイドからはわりかし受けが良かったりする。

設定（後書き）

如何でしたでしょうか？

もし何か意見・感想が御座いましたらドシドシ送って下さい。

ではここで、T O - K K 1 本人から一言。

「皆サン。コレカラモ宜シクお願い致します。アトコンナ作者デスガ、ドウカ見捨てナイデヤツテ下さい」

ちよ、待てコラ！？

第一話（前書き）

今回は一寸したオリジナル展開あり。これは違うという意見がありましたら、ぜひともご意見を。

それにしても、どうやって話し続けよう…。

第一話

結構今更かもしれないが、戦術ドロイドって何気に偉い立場でもあるんだよな。

提督や將軍の補佐なんか当たり前だが、作戦の内容等によっては艦隊戦や陸上戦とかの指揮を任される事もある。

…まあ俺の場合、生まれて（製造されて）から一度も前線に立った事は無いんだけどな。

その代わり、今までは後方で色々な仕事に就いていた。

將軍や提督達の事務等の補佐は勿論の事、捕虜の尋問や新兵器の開発・実験の補佐とか多岐に渡る内容をこなしたりしていた。

事務はまだいい。尋問も拷問とかせず、普通に誘導尋問や催眠療法、場合によっては自白剤で対処している。（拷問嫌いだからね、俺）

でも新兵器の開発・実験つてのが問題だった。

その新兵器が、デフォリエーターとか悪名高いブルー・シャドウ・ウイルス、そして極めつけがああ初代デス・スターとかだったんだ。どれもこれも碌でも無いものばかりだったが、それを作るロック・ダード 將軍やヌーヴォ・ヴィンディ博士といった人物も、ある意

味では碌でも無い奴だったりした。

シディアス卿に関しては言わずもがな、だ。

普通だったら「兵器開発」の時点で可笑しいと思うかもしれないが、生憎ドロイドとして過ごしている以上、上からの命令にはあまり逆らえないんだよな。

でもよくよく考えたら、こういった内容って別に俺がする仕事とかじゃないよな？というか俺如きの存在が関わるべき内容じゃないよな！？

ひょっとして、最終的には口封じの為にバラバラにされて、スクラップ？若しくは意識あるまま、溶鉱炉行きとか…？

…なんか、十分あり得るな。特に、グリーヴァス將軍辺りが嬉々としてバラバラにするイメージしか浮かばない…。

…でで、でも、ふ、ふふ深くかかか考えるべきではないよな！いい、いい今を楽しまないと！！うん！！（ガタガタブルブル）

あれ？でも逆に考えれば、俺って何気にこの世界の歴史に淡々と名を刻んでたりする？そう考えると、ねえ凄くない？俺って凄くない！？（馬鹿がいますが、気にしないで下さい。）

あ、あと話変わるけど、Tシリーズ戦術ドロイドって

「知能が高く、高度な情報分析能力を備えているが、傲慢で短気。そして自分本位な性格。また自ら優先順位を判断する為、矛盾のある指示を与える事も多かった。」というような設定があるが、それ

って本当だったんだな。

ある意味自分の事なのに、初めて知ったわ。

何でこの話になったのかというと、この間別の戦術ドロイドに行くわしたら、

「マダ、イチドモセンジョウニデテナイクセニ、デカイカオシテウロチヨロスルナ。ソレトモ、ハカイサレルノガコワクテ、ココニヒキコモツテルノカ？」

と言って、いきなり突っかかってきやがったんだ。

まあ後半事実だけどさ！！

でも思わずカツチーンときて

「ソウ言ウ貴様モ、何故ココニウロツイテイルンダ？アアソウカ。貴様モ、破壊サレルノガ怖クテココデ暇ヲ潰シテルノカ。済マナカツタナ、ソナナ事ニ気付カナクテ」

と返したら、

「フザケルナ！キサマノヨウナ、クスドロイドト、イツシヨニスルナ！！」と怒りながら去っていった。

暫くして姿を見せないと思っていたら、なんと共和国艦隊への攻撃に自ら志願して、乗っていた艦諸共宇宙の藻屑と化したとの事だった。

ざまあwww

まあそんなこんなで分離主義勢力の本部で過ごしてたら、グリーンヴァス將軍に突然呼び出された。

何か気に入らない事でもしたかと内心ビビってたら、「次の作戦に

貴様も参加せよ」との命令だった。

初陣という事もあり、「どんな作戦だろう」「何々を護衛せよ」とか、簡単なものかな」と内心調子に乗ってたなら、その作戦がとんでもないものだった…。

第一話（後書き）

さあここで問題です。我らが主人公（？）が派遣された場所とは何処でしょう？

？ジオノーシス

？ライロス

？コルサント上空

当てた方には素晴らしい物が…あるといいですね！

第二話 戦いの幕開け（前書き）

今回も、オリジナル設定及びオリジナル展開があります。
でもなんか説明臭くなっちゃった…。

9月23日 何箇所か修正しました。

第二話 戦いの幕開け

「司令官。上陸部隊の準備、完了致しました」

「ヨシ。別命ガアルマデ、全部隊待機サセテオケ」

「ラジャー、ラジャー」

この艦の艦長を務めるOOMコマンド・バトル・ドロイドの報告を聞きながら、俺は艦橋の窓から流れるハイペースを眺めていた。

クローン戦争の始まりから3年、戦局は共和国側に大きく傾いていた。

それを打開する為に、多くの部隊が「特別任務」 コルサントへの侵攻作戦 をグリーヴァス將軍から与えられていた。

俺が今率いている部隊も例に漏れない。

命令の発信元であるシディアス卿から、グリーヴァス將軍の率いる

上陸部隊を展開させたらそのまま敵を引きつける為に、艦隊の殆どを遊撃部隊　つまりは、体の良い囷だ　として展開させるという命令を受けていた。

最初はこの命令を聞いた時、会議の場が紛糾した。

ヌート・ガンレイ総督や、他の分離主義者の多くが同じような意見つまり

「いくらシディアス卿の命令でも、艦隊の殆どを、しかも敵の本拠地に向けて侵攻させる等正気の沙汰ではない！」

「そんな規模を引き連れていたら、共和国側に探知されてしまう！」

「それ程の艦隊を一つの惑星に向けて進撃させる位なら、他の星に割り当てた方が良い」

といった意見が多くを占めていた。

まあ俺も一介の戦術ドロイドとして、同じような意見を述べたんだけどな。

しかし、最終的な決定権はグリーヴァス將軍やドゥークー伯爵が握っており、またシディアス卿の命令には逆らう事が出来ずに、結果コルサント侵攻が決まった。

…決して紛糾している時にキレたグリーヴァス將軍が、意見を言おうとした他の戦術ドロイドをライトセイバーで切り裂いて、脅して決定させたという訳ではない。

絶対に違うのである……！！

そうして俺は今、自分が率いる事になった艦隊の旗艦を務める、戦艦「ワーカーズ・ボエジ」の艦橋にいた。

この艦も、コルサントへの奇襲作戦の為に数多く編成された艦隊の一つ、つまりは俺に割り当てられた艦隊の旗艦を任されている。

そして、今回の奇襲作戦の為に特別に改造させたりもしている。

この艦は、プロヴィデンス級キャリアー/デストロイヤーをベースとして、グリーヴァス將軍の旗艦である「インヴィジブル・ハンド」と同様に、戦闘機の母船・侵略艦としても十分に役立たせる為に艦尾のリアクター・ベイを大幅に再整理させ、広大なハンガー・ベイを確保させた。

また船体後方のヒレのような尖塔の内部は、戦略ディスプレイ、ブリーフィング・テーブル、周辺の宇宙空間を広く見渡せる観測デッキ等を備えた中央司令センターとして機能させていた。

他にもこの尖塔に当初からある通信およびセンサー・ポッドはそのままにしている。

そして大きな特徴として艦首のブリッジとは別に、艦体の中央部にもう一つ艦橋を設けさせている。

何故、わざわざ艦橋を増設したのか？

それは、ボサウイ星系での艦隊戦や、惑星クリフトフシスの封鎖作戦によるもの大きい。

ボサウイ星系では、グリーヴァス將軍が艦隊を率いたにも関わらず共和国艦隊に敗北したのだが、この時率いていた艦隊の内の一隻がアナキン・スカイウォーカーによって艦橋を破壊され撃沈されている。

惑星クリフトフシスでは、惑星の封鎖を指揮していたトレンチ提督の乗る「インヴィンシブル」が、これまたアナキン・スカイウォーカーの機転によって、シールドを再充填させている間に自らが放った魚雷によって「インヴィンシブル」の艦橋を直撃し、大破させてしまった。

この爆発で艦橋は完全に破壊され、艦橋に通じる通路を経由して連鎖爆発を起こし、船の背面が引き裂かれたのだ。

トレンチ提督は戦死し、「インヴィンシブル」も航行不能となってしまったのである。

これらの反省を踏まえ、もう一つ艦橋を設けた次第である。

これは他のプロヴィデンス級や、あの「インヴィジブル・ハンド」にはないこの艦独自の仕様となっている。

俺が今いるのはこの増設した方の艦橋、いわゆる第二艦橋の方である。

また、艦首の第一艦橋に通じる通路全てに隔壁の大幅な増設を行った。

こうすれば、第一艦橋が破壊され連鎖爆発を起こしたとしても、数多くの隔壁で防ぐ事が出来るからである。

あともう一つ、今いる第二艦橋をあの船体後方の尖塔に設けても良かったのだが、それは止めておいた。

理由として戦いの最中に流れ弾等で、尖塔の間のエレベーターがあるやたら長いメイン・コミュニケーション及びセンサー・ポッドが破壊されてしまったら、忽ち共和国艦隊の餌食になってしまうからである。

艦自体もだが、流れ弾で切り離されてしまった尖塔もだ。

そうなった場合、この艦を指揮するのが艦首の第一艦橋になり、その際の指揮官が先程の艦長とは別のOOMコマンド・バトル・ドロイドとなる訳だが、ハッキリ言ってももの凄く不安である。

逆にそのまま敵に鹵獲されそうで怖い。

だから尖塔に第二艦橋を設置するのを止めたのである。

こうして、コルサント侵攻に向け大幅に改良された戦艦に乗っているのだが…。

艦隊を率いるのは良いとして、初陣にも関わらず旗艦を改造してお

咎めなしで本当に良いのか等と、未だに内心怯えていたりするのは内緒である。

（主人公は、自分が既に將軍の地位にいる事に全く気付いておりません。）

ん？だつたら何で旗艦にこんな魔改造なんか施したんだって？
…俺が死にたくないからに決まってるじゃん！！

だつて旗艦だよ！？集中砲火浴びるに決まってるじゃん！
この艦ヤラれたら、率いてる艦全てが敵の餌食よ！？
なんかそついうのイヤじゃん！！

まったく、偉い人にはそれがわからんのですよ！
（お前も偉い人（？）だろうが）

あ、そうだ。準備が完了した事グリーンヴァス將軍に報告しないと。

「將軍。コチラ戦艦「ワーカージ・ボエズ」。上陸部隊ノ準備、全テ完了致シマシタ」

『よし！ならばハイパースペースを出たら、直ちに部隊を上陸させる！その後、貴様の艦隊は共和国艦隊に攻撃を加えるんだ！』

「了解シマシタ、將軍」

こうして報告を終え、後はハイパースペースを出るのを待つだけとなった。

…。

「司令官、間もなくハイパースペースを抜けます！」

！！いよいよか。

「分カツタ。ハイパースペースヲ抜ケタラ、コルサントニ向ケテ直チニ上陸部隊ニ進撃ヲ開始サセロ」

「ラジャー、ラジャー！全部隊に告ぐ、全部隊に告ぐ！！ハイパースペースを抜けたら、直ちにコルサントへ向けて、上陸を開始せよ！！繰り返し、ハイパースペースを抜けたら直ちに全部隊はコルサントへ向けて出撃せよ！！」

さあ、戦いの始まりだ！！

第二話 戦いの幕開け（後書き）

前回のクイズの答え。

正解は……………？番のコルサント上空でしたー！！

正解したh19079さん、楽毅さんおめでとうございまー！！
す！！！！

因みに船の名前は「クリムゾン・スカイ」からの引用です。

あと船の形は、バトルフロント？に出てきた分離主義勢力の形となっています。

さて、どうやってこの後話続けてこう…。

第三話 コルサント上空（前書き）

9月23日 ほんの少し修正しました。

第三話 コルサント上空

「司令官！ハイパースペース抜けます！」

艦長のその報告の直後に、全艦がハイパースペースを無事に抜ける事が出来た。

これが混戦の最中だったらと思うと正直ゾツとする。

ハイパースペースを抜けた後に、戦艦通しが正面衝突…なんて事も十分に考えられるからだ。

敵の艦にぶつかるならまだしも、味方の艦にぶつかるなんて最悪の一言に尽きる。

俺が率いている艦隊は、まだ先発隊の内に入っていた為にそんな事はなく、また同時に共和国側の意表をつく事も出来た。

相手側が驚き、戸惑っている隙に部隊を上陸させられる。

「ヨシ艦長。マズ、ハイエナ・ボマーデ上陸地点及ビソノ周辺ヲ爆撃シテ、露払いヲシロ。ソノ後、直チニ全テノ上陸部隊ヲコルサントニ向ケテ進撃サセルンダ。アト全ヴァルチャー・ドロイドノ三割、イヤ半数ヲ護衛トシテ送り込ムヨウ命令シロ」

「ラジャー、ラジャー！全部隊に告ぐ、全部隊に告ぐ！！ハイエナ・

ボマーは上陸地点及びその周辺を爆撃せよ！その後直ちに上陸部隊はコルサントへ向けて、上陸を開始せよ！！繰り返す、ハイエナ・ボマーは上陸地点及びその周辺を爆撃し、その後直ちに上陸部隊はコルサントへ向けて、上陸を開始せよ！また、ヴァルチャー・ドロイドの半数は護衛として出撃せよ！」

こうして俺は、首都コルサントに向かっていく上陸部隊を眺めながら送り出す事が出来た事にホッとしていた。

しかしその直後に、命令し忘れていた事を一つ思い出し、慌てて艦長に命令した。

「アアソウダ、艦長。今回ノ作戦ハ陽動作戦デモアル。民間区画ヤ公共施設、退却スル敵、及ビ敵ノ負傷兵ニハ攻撃スルナト、全部隊ニ敵命シロ。場合ニヨツテハ、降伏モ呼び掛ケロ。余計ナ戦イハシナクテモ構ワン」

「ラジャー、ラジャー。…あー、でも司令官。もし民間区画に敵がいて、攻撃してきたらどうしますか？あと負傷兵なんかも攻撃してくると思いますが…」

「ソレデモダ！タトエ民間区画ニ敵ガイタトシテモ、攻撃シテハナラン！負傷兵ニモ関シテモ同様ダ！トニカク、コレハ命令ダ！！」

「ラ、ラジャー、ラジャー！全部隊に告ぐ、全部隊に告ぐ！！今回の作戦は陽動作戦でもある。民間区画や公共施設、退却する敵、及び敵の負傷兵には攻撃するな！場合によっては、降伏も呼び掛ける！余計な戦いはしなくて良い！繰り返す、今回の作戦は…」

慌てて艦長が命令を飛ばしているのを聞きながら、俺は心の底で安

堵していた。

今回の作戦は、敵首都への侵攻だが、それは民間人にも被害が出る事を意味している。

そうならない為に、今回の上陸部隊の集結地点を民間区画から程遠い場所に指定している。

つまりは敵部隊の目の前で部隊を上陸させる訳である。

双方の被害も相当なものになる事が容易に見て取れるが、民間人に被害を出させない為に、仕方が無いと割り切るしかない。

負傷兵に関しても、もう攻撃出来ない相手を撃つなんて真似、俺には許せなかった。

そうなってしまうば、もう戦争とは関係なく単なる虐殺でしかなくなるからだ。

…矛盾している事は分かっている。

しかし、しかしだ。

ドロイドとして攻撃を命令されている以上、命令に逆らう事は許されない。

もうこうなってしまった以上、現場レベルで命令を改変するしかないのである。

どんなに民間人に被害を出さなくしても、やっている事はあまり

変りない。

「偽善」と呼ばれるかもしれない。

だが、そうなる事は覚悟の上である。

ドゴオオオオオオオン!!!!!!

そんな事を考えていた時、突然轟音が響き艦全体が揺れた。俺と他のドロイド達も大きく揺さぶられたが、踏み留まる事が出来た。すぐに敵からの攻撃を受けた事が分かった。

「司令官！敵艦からの攻撃です！」

「分カツテイル！！艦長、被害ハドウダ！？」

「被害は、あー…どうも流れ弾だったらしく、被害はありません」

「ソウカ。今ノ攻撃ハ、ドノ艦カラノダ？」

「ええと…分かりました！攻撃してきたのはあの艦隊です！！」

「！！！」

そう言つて艦長が示した先、つまり左前方には二隻のヴェネター級スター・デストロイヤーに、三隻のアクラメーター級アサルト・シップからなる計五隻の艦隊があつた。

他にも味方の艦が周囲にいる筈である。

しかし、いきなり目の前で敵艦が現れ部隊を上陸させているのを見て、慌てて編成した事は一目瞭然であつた。

ヴェネター級スター・デストロイヤーが脅威である事は、疑いようがない。

しかしアクラメーター級アサルト・シップは大型艦船を攻撃する為の装備を持つてはいるが、本来この艦は惑星への攻撃が目的である。また艦隊戦用の武器もそれ程の精度を持つておらず、砲塔の向きを変えらるにも数分間の時間が必要となる。その為に些か役不足の感もある。

だがその攻撃力は無視する事も出来ず、馬鹿には出来ない。

こちらは旗艦「ワーカージ・ボエズ」を始め、プロヴィデンス級キヤリアー/デストロイヤーが五隻、ミニニフィセント級スター・フリゲートが三隻、レキュザント級ライト・デストロイヤーが一隻、ルクレハルク級バトルシップが二隻の、計十二隻からなる堂々たる艦隊である。

これだけ見れば簡単に勝てると思うかもしれないが、生憎ここはコルサント上空。

敵の首都防衛艦隊が編成を整えたら、攻撃してくる事はまず間違いない。

だが敵が編成を整え攻撃してきても、こちらも続々と艦隊が到着する。

そうなれば、混戦は必至である。

…本当に、先発隊の内に入って良かったなあと思う。

「司令官、敵艦隊が攻撃を始めました！」

「分カットイル！！全艦シールド展開！全砲門、アノ敵艦隊二照準ヲ合ワセロ！」

「ラジャー、ラジャー！」

こうしている間にも、敵艦隊は砲撃を続けてくる。

遠すぎるのか、それとも敵の司令が新米で慌てているのか、さっきの一弾以来全く当たっていない。

でも撃たれっぱなしってのは、なんかムカつくものがある。

「司令官！全艦シールド展開、完了しました！また全砲門、射撃準備完了致しました！」

よし！！

「目標、左前方ノ敵艦隊！！全艦、撃ち方始め！！！」

「ラジャー、ラジャー！！！」

こうして、コルサント上空における戦いが、今まさに幕を切つて落とされたのである。

第四話 コルサント上空（2）

臨時編成された共和国艦隊の攻撃も、中々なものだった。

数は少ないといえども、ヴェネター級とアクラメーター級のそれぞれの火力は計り知れない。

いくら偏光シールドを展開させているからと言って、絶対ではないのだ。

事実、映画の中ではグリーンヴァス将軍の「インヴィジブル・ハンド」もヴェネター級からの至近距離における連続攻撃によって、その艦体に致命的な損傷を被った。

そしてその損傷が遠因となり、「インヴィジブル・ハンド」は沈没しているのである。

「司令官！敵艦隊、まっすぐこの艦隊に向かってきます！！」

「分力ッテイル！全艦、敵艦隊二砲火ヲ集中サセロ！！」

「ラジャー、ラジャー！」

しかしやられてばかりという訳ではなく、こちらも向かってくる共和国艦隊にありつただけの火力を浴びせた。

あちらの砲火も凄かったが、こちらの十二隻からの砲火は更に凄まじい物があり、集中砲火によって簡単に共和国艦隊を引き裂いていたのである。

まず二隻のアクラメーター級アサルト・シップが被弾、炎上し隊列から落脱していった。

side 共和国艦隊

「提督、アサルト・シップ二隻が被弾！隊列を離れます！」

「くっ…！！」

ヴェネター級スター・デストロイヤー「ジャステイス」の艦橋から指揮を執っていたアーサー・ドルムント提督は、クローンからの報告を聞いて苦々しく顔を歪めた。

彼にとっては困惑の そして同時に最悪の 事態の連続であった。

突然目の前に敵の大艦隊が現れたと思ったら、次の瞬間には無数の上陸艇がコルサントに向かっていったのである。

その様子を見て最初は混乱したが、すぐにその状況が「奇襲」である事を判断。

そして急いで最寄りの艦艇群に招集を呼び掛け臨時の艦隊を編成、目の前の敵に戦いを挑んだ訳である。

（数には劣るが、所詮相手はドロイド。頭を潰せば打ち破るのは容易いだろう。）

そう信じて疑わなかった。

だが、その結果は手痛いものとなった。

敵旗艦を目指し、砲撃を加えつつ艦隊に近づいていったのだが、瞬間に僚艦が沈められてしまったのである。

しかしそうやって驚いている間にも、敵艦隊からの砲火は止む事はない。

「全艦、急速回頭！あの敵艦隊から離れるんだ！！マツギヤバン！急いでこの事態をジエダイや他の艦艇、地上部隊にも知らせろ！！」

「イ、イエス・サー！！」

瀕死の艦隊の指揮をとる彼は全艦に回頭命令を発しつつ、先程報告してきたクローンにこの事態を報告しようと懸命に命令を発した。

しかし、ここでも神は彼を見放した。

「駄目です、提督！通信が妨害されています！！」

「何だと！？」

（相手はただのドロイドではなかったのか！？何故こんな…！！）

「提督、シールド減退！本艦はもう駄目です！！」

彼はその叫ぶような報告を聞き、自らの最期を悟った。

そして次の瞬間、敵の砲台が光り「ジャスティス」の艦橋にいた全ての存在を、この世から消し去ったのである。

side分離主義艦隊

アサルト・シップが沈められる様を見た臨時編成の艦隊は、瞬時に先程の状況を判断し離脱しようと試みていた。

しかし、その隙を逃すはずもない。

敵艦隊の通信を妨害し、すれ違いざまに離脱しようとしていたのに対し、大砲撃戦を展開　つまりはその土手っ腹にターボ・レーザーを浴びせるように食らわせたのである。

瞬く間に残っていた三隻も砲火の餌食となった。

「司令官。敵艦から脱出ポッドの射出を多数確認。どうしますか？」

「…放ッテオケ。負け犬二八用ガナイ。ソレニ令、艦隊二八捕虜ヲ載セル場所モ、食料モ無イ。」

「ラジャー、ラジャー。」

嘘である。いや食料が無いというのは本当だが、それだけではない。捕虜を捕まえる事は戦争において何ら不思議ではない。

しかしこの艦は、いやこれから現れるであろう全ての艦隊は、「奇襲」が目的である。

もし、捕虜を捉え艦に載せたとしても、共和国側が捕虜の存在を知らず沈めてしまったら元も子もない。

味方に殺される　最悪以外の何物でもない。

そしてもう一つ、「無事に生き残って欲しい」ただこれだけが念頭にあった。

だから敢えて脱出ポッドを回収せず、見逃したのである。

そうすればコルサントの何処か、空港や味方の基地、場合によっては味方の艦が拾ってくれる筈だからである。

しかし今の攻撃で、こちらは無傷という訳ではない。

「あー、司令官。ご報告したい事が……」

「何ダ。」

「は、はい。先程の攻撃でフリゲート艦「7388」と「5387」、それにデストロイヤー艦「8392」に被害が出ています。」

「艦長、被害ノ詳細ヲ。」

「はい。「7388」は被害が甚大で、隊列から外れつつあります。艦隊の一番外側にいた事と、あとどうも航行システムに問題が発生し、艦首を敵艦隊に向けた事が原因らしいです。」

ふと外に目をやると、あちこちから爆発が起こり炎上しながら、隊列を離れていく「7388」の姿があった。

レキユザント級の「8392」は、分離主義勢力の艦船開発プログラムによって生み出された典型的な船である。比較的製造コストの低いこの艦は、堅牢で使い勝手も良く、信頼性もあった。

だがミューニフィセント級である「7388」と「5387」、「2635」は別である。

ミューニフィセント級は正直一長一短なものがある。火力は申し分ないが、動きが遅い上に防御力にも問題があった。

艦隊を編成し、シールドを起動させておきながら、スター・デストロイヤー一隻に全滅させられたという報告もある程である。

しかし逆にスター・デストロイヤーを相手にしても、数隻で当たれば勝利できるだけの戦闘力をも持つのも事実である。

つまり指揮する者によって、その結果が左右される事を如実に表している艦とも言える。

元々、インター・ギャラクティック銀行グループにおける専用の秘密通信ネットワークの防衛や、多額の負債を抱える惑星への威嚇、重要な資産の輸送、高価な財宝の護送等を行う際に使用していた艦

である。

要は銀行グループ専用の輸送船とも言える艦であり、最初から戦争をする目的で作られた訳ではない。

個人的には、艦のスタイルはいかにも戦艦っぽいのが好きなんだが、しかし機動がなあ……。あと防御もなあ……。

話を元に戻すが、出来る事なら「7388」を救ってやりたかった。

しかし誰がどう見ても、「7388」は手の施しようがなく、例え修理ドロイドを総動員させたとしても、もう助からないであろう事は明白であった。

だから、俺は非情の決断を下した。

「他ノ艦ハ？」

「はい。「5387」は中破、また「8392」も小破ですが、両艦共に航行及び攻撃には問題ないそうです。」

「ソウカ。ナラバ、コノママ航行ヲ続ケロ。」

「ラジャー、ラジャー。」

俺は敢えて、見捨てるという選択肢を選んだ。

救出しようとして近づいても、大爆発で味方が巻き込まれる可能性もあったからだ。

それにもし、共和国が鹵獲し何か重要な情報を引き出そうとしても、あれだけ爆発が起きていればデータどころか全てが吹っ飛んでいる筈である。

また、介錯…とまでは行かないが「7388」を砲撃し、自沈処分しようとも考えたがそれも止めておいた。
敵の本拠地にいる以上、補給は望めない。だから弾薬に余裕を持たせたかったというのもある。

「司令官、大変です!!」

「何ダ、一体ドウシタ!!」

航行システムのコンソールを操作していたバトル・ドロイドから、突然の報告が挙がった。

「先程の攻撃を見て、他の共和国艦艇が続々と向かってきます！」

「何ダト！？」

まずいな……。こちらは既にたった一回の戦いで戦艦一隻を失っている。

しかも、いくらこちらが十一隻とはいえ、向こうは膨大な数である。また首都防衛艦隊の存在も無視出来ない。

「コチラノ艦隊ハ、後ドレ位デ到着スル？」

「はつ。ええと、もう間もなく到着するとの事です。」

その報告の直後に、そう遠くない所から後続の艦隊が姿を表した。

えーと、プロヴィデンス級キャリアー／デストロイヤーが一隻に…ミューニフィセント級スター・フリゲートが二隻だな。

「モシ可能ナラバ、アノ艦隊ニ上陸部隊ヲ送り込ンダラ、コチラノ編成ニ加ワルヨウ伝達シロ。」

「ラ、ラジャー、ラジャー！」

戦いはまだ、
始まったばかりである。

第五話 コルサント市内（前書き）

9月23日 少し修正しました

第五話 コルサント市内

Sideコルサントへ地上部隊へ

「クソッ、冗談じゃない!!」

一人のクローン兵がそう憎らしげに呟き、ブラスター・ライフルを撃ちまくっていた。

それもその筈、彼の目の前にはドロイドの大群がこちらに迫っていたのである。

伍長である彼は、いつも通り警備や哨戒任務、後は訓練といった事は要は他愛のないものをしながらその日一日を終える筈であった。

しかし警備任務に就いていた時、唐突にそれは起きた。

自分の担当する警備箇所近づいた機影が、猛スピードで上空を通り過ぎたと同時に、いきなり爆発が周囲を襲ったのだ。

爆風で吹き飛ばされた彼は朦朧とする意識の中、猛スピードで通り過ぎたその機影を知っていた。

ハイエナ・ボマー 分離主義勢力が使う爆撃機である。

「（何故こんな所に？ここはコルサント、共和国の本拠地とする場ではなかったのか!?）」

混乱しつつも、何とか周囲の確認を行おうとしたが、そこで彼が見たのは到底信じられない光景であった。

分離主義勢力の爆撃機や戦闘機が空を乱舞して、上陸艇が着陸しドロイドの大群を吐き出していたのだ。

そしてあちこちで爆発が起き、仲間達の悲鳴が聞こえた。自分がいた場所に目をやると、自分が警備していた場所は先程の爆撃で粉々になっており、他の仲間は全員死んでいた。

「こちら第十区画、誰か聞こえるか！？応答してくれ！！」

『こちら第八区画！一体どうした！！何があった！？』

「敵の奇襲攻撃だ！！仲間は皆殺された！！すぐそこまで敵が迫っている！！今すぐ増援を寄越してくれ！！！！」

『敵の攻撃だあ！？一体何を言ってるな、何だあれは？う、うわああああああ……！！！！！！』

そしていきなり通信が切れ、その直後に何処からか爆発が聞こえた。

「クソッ！！」

そうして彼は落ちていたブラスター・ライフルや手榴弾を拾い上げ、迫り来るドロイド軍を相手に孤軍奮闘する羽目になってしまったの

だ。

「畜生！畜生！！畜生！！！」

まさか、自分の部隊の目の前で上陸してくるなんて、一体誰が予想出来ただろうか。

「こちら第十区画、聞こえるか！？敵の攻撃を受けている！！仲間は皆殺された！！誰か応答を！！！」

そして、そうしている間にも敵の数は増え続けている。

「クソッ！聞こえるか、こちら第十区画！敵の猛攻撃を受けている！！誰でもいい、とにかく返事しろ！！！」

『こちら第七区画、聞こえる！一体どうなっている！？状況を！！』

「敵の爆撃機がいきなり現れたと思ったら、俺達がいた所吹き飛ばしやがったんだ！！そうしたらいきなり上陸艇が着陸してきて、目の前でドロイドの部隊を展開させてる！！仲間は爆撃で皆殺された！！生き残ったのは俺一人だけだ！！！」

『何だって！？分かった、状況を確認した！今すぐ増援を送る！何とか持ちこたえてくれ！！』

「早く来てくれ！もう弾が無くなりそうだ！！！」

『分かった!!』

そうやって通信を切り、ようやく目の前の敵に集中し、狙い撃ち始める事が出来た。

彼はブラスター・ライフルを撃ちつつ、最も近づいてきたバトル・ドロイドの部隊に手榴弾を数発お見舞いさせた。

しかし敵の数は更に増え、そして先程の通信にあったように、ブラスター・ライフルの弾も尽きかけていた。

味方の増援が来るのが先か、彼のブラスター・ライフルの弾が尽きるのが先か、それは誰にも分からなかった。

だが次の瞬間、彼のすぐ後ろで爆発が起こり、空中に投げ出されたと思っただけ地面に叩きつけられた。

最悪な事に、彼が爆風で飛ばされた所は、先程まで自分が銃口を向けていたバトル・ドロイド達のと真ん中であつた。

朦朧とする意識の中、彼が見たものは無数のバトル・ドロイドが、自分にブラスターを向けている姿だつた。

「ク……ソ……」

そうして彼は意識を失つた。

「なあ、こいつどうする？殺すか？」

「待て。司令官から「今回は陽動作戦で、民間区画や公共施設、退却する敵、及び敵の負傷兵には攻撃せず、場合によっては降伏も呼び掛ける」との命令だ。あと「余計な戦いはしなくて良い」とも言われてる」

「司令官って、グリーヴァス將軍か？そんな事言うか？」

「バカ、違う。もう一人いるだろ、あの戦術ドロイドの……」

「あー、あの。じゃあ納得だ」

「で、どうする？」

「捕虜にでもするか？」

「そうしよう、そうしよう」

そうして彼は、ドロイド軍が乗ってきた上陸艇に乘せられようとしていた。

『伍長――――！！！！！！』

「！！！？？」

しかし、その危機を救う者達が現れた。

先程の通信を聞いた第七区画のクローン・コマンダーの率いる兵士達が、増援にやってきたのだ。

ドロイド軍の数は膨大である。その上無慈悲な敵戦闘機もその空を乱舞している。

それにも関わらず、自分達の兄弟を救うべく、己の身の危険を顧みずにやってきたのだ。

「ガンシップは伍長を囲むように着陸しろ！ファイターは敵を牽制しながら、ガンシップを援護！伍長を救出した後、ファイター及びガンシップは周囲を攻撃しつつ、直ちに退却しろ！」

『サー、イエス・サー！！』

クローン・コマンダーに率いられた部隊は、ドロイドの大群に襲いかかった。

ファイターは敵戦闘機や敵の地上部隊に伍長に当たらないように攻撃を加えつつ、ガンシップを援護していた。

ガンシップは乗っていた兵が伍長を引き摺っているドロイドを狙撃しつつ、周囲を取り囲むように着陸した。

伍長を救出したガンシップは、バトル・ドロイドからの一斉射撃を受けながらも急いでその場から離陸した。

それを追撃しようとしていた敵戦闘機も数体いたが、瞬く間にAR C-170 スターファイターの餌食となった。

電光石火の早技だったが、伍長を救出した彼等は自分達の兄弟を助ける事が出来て安堵していた。しかし、次の瞬間には信じられない思いが彼等の胸中にあった。

伍長である彼を除いて、彼の部隊は全滅。

しかも、自分達がカミーノと同じ位に守らなければならないような場所へ、バトル・ドロイドの大群の侵攻を許してしまったのだ。

兵士達を乗せたガンシップやファイターは、分離主義勢力の軍隊が自分達を守るべき場所を行進する光景を尻目に、急いで退却していった。

第六話 コルサント市内（2）（前書き）

今回もオリジナル設定、オリジナル展開あります。
妄想バンザイ！！
ただど何かグダグダ…

9月23日、加筆修正しました。

第六話 コルサント市内（2）

Side共和国艦隊ドック

その日、コルサント市内だけでなく、艦艇が集結しているドックにいたトルーパー達にとっても、最悪の日の始まりであった。

ドックには数多くの作戦に参加し、傷だらけになって帰って来た多くの艦艇が修理を受け、その羽根を休めながらも次の出撃に備えていた。

また、クローン兵達が次に与えられるであろう新たな作戦の為に必要な多くの武器や燃料、それに食料もそこに集められていた。

そして、先の戦闘での穴埋めの為に集められた新兵達も例外ではなかった。

「しかし、次の任務があるまでここで足止めなんて、つまらないものだな」

「しょうがないだろ。俺達が乗る艦が、出撃直前にまさかの不具合で、緊急修理の為に出航出来ないなんて誰が予想出来た？そんな事より、ここで不満を口にする暇があるなら、傷ついた兄弟達に見舞いでもしに行ったらどうだ？」

「冗談じゃない！そんな事、あの艦がこのドックに入ってきた時に真っ先にやってるよ。皆、治療を受けて元気になったのを見て安心したよ」

「そうか…。良かった…」

「ああ…。」

現状に不満を持っていた彼であるが、その心底には他の兄弟達を想いやる心で満ちていた。

「なあ暇つぶしにデジャリックでもどうだ？」

「俺は遠慮しておくよ、まだやる事があるしな」

「そうか、じゃあ俺は誰かとやる事にするよ。じゃあ、また後でな」

「ああ」

そうして自らの暇つぶしの相手を探し始めた時、急に周囲が騒がしくなっている事に気が付いた彼は、通りかかった一人のクローン兵に事態を尋ねたが、そこで驚くべき内容を聞かされた。

「何だ、一体どうしたんだ？」

「はっ、我が軍のものとは思えない正体不明の機影が多数、高速でまっすぐこちらに向かっていているとの情報がありました！民間のものとも思えない為、対空警戒体制をとれとの命令を受けています！」

「何だって！？そうか…。呼び止めて悪かった、早く配置に付け！」

「イエス・サー！」

「ここはコルサントだぞ…。一体どうなっているんだ？」

彼は疑念に駆られ、思わずそう呟いたが、次の瞬間にはそんな思いも吹き飛ばされた。

「ハイエナ・ボマーだ！！」

「！？」

クローン兵の誰かがそう叫んだと同時に、周囲を爆風が襲った。

その爆風は、彼がいた場所をも呑み込んでいった。

「（何故…。なん、で…こんな…所に…）」

爆風で吹き飛ばされた彼は、そこで意識を失った。

S i d e コルサント市内／共和国艦隊司令部

市内の各所でドロイド軍が侵攻を開始した時、コルサントの艦隊司令部でも騒乱が起きていた。

「おい、市内からあちこちで爆発が起きてるぞ！！しかもあそこは、部隊が駐屯している所じゃないのか！？」

「コルサント市内の駐屯部隊から何か連絡は！？」

「駄目です！第八区画、第十区画の駐屯部隊からの通信が途絶！また情報が錯綜し、混乱が起きています！！」

「衛星軌道上の艦艇から何か情報は！？」

「こちらも駄目です。通信が妨害されている様です。レーダーも、ジャミングが掛かっているらしくはつきりと写りません」

「そんな馬鹿な！？もう一度通信を試みる！！」

「イエス・サー！！…駄目です！やはり、通信が妨害されています！」

「まさか…分離主義者の奴らが、このコルサントに奇襲を？」

「馬鹿な、あり得るものか！ここはコルサントだ！銀河系の中枢とも言える場所だぞ！！奇襲なぞ…」

そこに、レーダーの復旧に取り組んでいたクローン兵から歓声のよな声で報告が入った。しかし、その声色も直ぐに驚愕のものへと変わった。

「やった、やったぞ！コマンダー、レーダーが復活しました！…な、何だこれは！？」

「何だ、一体どうした！」

「大変です、コマンダー！衛星軌道上に分離主義者の大艦隊です！」

「何だと！？」

「今、五隻の艦艇が迎撃を行っていますが…ああっクソッ！艦艇がやられました！！一隻を沈めた模様ですが、他は…」

そして、更にそこに追い打ちをかけるかの様な報告が入ってきた。

「大変です！膨大な数の正体不明の謎の機影が、まっすぐこちらに向かって来ています！！」

「何！？」

「通信を無視し、定められたコードも無視しています！明らかに、我が方や民間の物ではありません！！」

「やはり、奇襲では…」

「言われなくても分かってる！！」「機影、進路変わらずまっすぐ向

「かってきますー!!」クソツ、迎撃だ!全ファイターを出撃させる!」

「イエス・サー!!--いえ、待って下さい!半数近くが進路を変更!これは!」

「どうした!?はつきり報告しろ!」

「そんな、まさか!大変です!進路を変えた敵の半数が、ドックに向かっています!」

「何だと!?まずい!今あそこには、次の出撃に必要な弾薬や燃料、それに修理の為にドック入りしている艦が多くいるんだぞ!」

「ドックとの通信は!?!」

「駄目です!通信が妨害されていて、連絡の取りようがありません!」

「だったらファイターを数機、連絡に回せ!早くしろ!」

「イ、イエス・サー!!--」

「敵、間もなく上空に現れます!!--」

「クソツ、全ファイターは迎撃に当たれ!対空戦闘用意!!--」

「イエス・サー!!--」

彼等共和国軍にとつて、とても長い一日が始まろうとしていた。

第七話 コルサント上空（3）

Side分離主義艦隊 旗艦「ワーカース・ボエジ」

「司令官、予定通り部隊を展開させました。奇襲は成功です」

「ヨシ。ナラバ我々ハ陽動ノ為、コノママ敵艦隊ニ攻撃ヲ加工続ケ
口。アト、ハイエナ・ボマーヲ呼び戻シ次ノ出撃ニ備エサセロ」

「ラジャー、ラジャー」

「私ハ少シ席ヲ外ス。艦長、暫クココハ任せタゾ」

「ラ、ラジャー、ラジャー……」

俺は艦長に命令を発した後、シディアス卿に連絡を取る事にした。
事前に「攻撃を開始したら、すぐに連絡せよ」と、シディアス卿が
自ら俺に命令を下してきたからだ。

我々分離主義勢力が「パルパティーン」を「誘拐」する為には、攻
撃の手際やタイミング等を合わせなければならぬ。

その為に、この通信が必要不可欠となっている次第である。

そしてそれは、混乱している今だからこそ出来る事でもあった。

本当ならば、この通信自体行われるはずのものではないのだ。

しかし、さも「銀河共和国元老院最高議長パルパティーン」が「分

離主義勢力に襲われ、誘拐された」ように見せる為に、自分の部下にそれらしい場所に配置させ、その「誘拐される」場面を見せる必要があったのだ。

そもそも今回のこの戦いは、シディアス卿が一時的にコルサントを離れる事に重きを置いていた。彼はこの攻撃で自身を誘拐させる事によって、自分の足跡を追おうとするジェダイの試みを阻止する事を目的としていた。

しかしその事に気付いている人物は、誰一人としていない。

俺を除いて。

だがもし、この通信のタイミング等がずれ敵味方のどちらかに傍受されてしまった場合、分離主義内だけでなく共和国側でも、「パルパティーン」が「シス」だという事がバレてしまう。そうなると色々と厄介な事になり、シディアス卿だけでなく俺自身の破滅をも招きひく事に成りかねない。

いくら通信をこの艦だけに限ったとしても、油断は禁物である。

正直シディアス卿はどうでもいいのだが、しがない戦術ドロイドの俺としては、そんな事は絶対に避けたい事柄である。

シディアス卿への忠誠なんぞは、はなっから持ちあわせてはいない。

あくまでも自分の保身の為だ。

その為に、今まで表舞台から出ようとは思っていなかった。

そんな事を思っている内に、通信室に着いてしまった。
グリーヴァス將軍はシディアス……もといパルパティーン元老院議長を誘拐する為に、上陸部隊と共に地上の方に向かった。

通信室に入り、通信システムを起動させた。すぐに繋がったが、ホログラムに浮かび上がったその姿は、映画通りの黒いローブに全身を覆った薄気味悪い姿であった。

そしてその姿は、グリーヴァスのような直接的な暴力を彷彿させるものとは違い、見た者の心に忍び込み、恐怖を植えつけるかのような空気を纏っていた。

俺は片膝について臣下の礼を取り、シディアス卿と向き合った。

「閣下、コルサントへの侵攻、無事二開始シマシタ。マタ上陸部隊モ、上陸地点二侵攻サセテイマス。第二波、第三波モ間モナク出発シマス。全テハ、予定通りデス」

『よし、よし。よくやったぞT O - K K 1。お主はこのまま、共和国艦隊に攻撃を加え続けろ。上陸部隊も、絶えず送り続けるのだ。後続の艦隊も、お主の好きなように扱って構わん』

「感謝致シマス、閣下」

『これで、調子に乗っている共和国の奴らに目に物見せてくれるわ……フッフ、奴らの驚く顔が目には浮かぶわい』

シディアス卿はこれから起こるであろう全ての事を、楽しみ、そして待ち望んでいるかのように邪悪な笑みを浮かべていた。

それは、見た者全てに破滅や死を予感させるものでもあった。

『そろそろ共和国の奴らに気付かれるかもしれん。これで通信を終える。よいか？くれぐれも奴らを侮るでないぞ』

「イエス、マイロード！」

そうして通信を切り、俺は再び艦橋に戻っていった。

そこでは、丁度新たに現れた共和国艦隊によつて戦況が苛烈に成りつつある戦場と、艦長が慌てている姿があつた。ある意味で間一髪だったのではないかと感じた。

何でかつて？

だってこいつ、敵に攻撃命令発するどころか「司令官は何処ー！？」って慌てふためてたんだもん。お前、これ「ドリフ」とか「水曜どうでしょう」やってる訳じゃねえんだぞ！？
せめて攻撃しろよ！敵をよ！！

そんな思いを余所に、艦長は救世主を見つけるが如く俺に気付いた。
遅えんだよ、馬鹿！！

「あ、司令官！丁度いい所に！新たに敵の増援が現れました！！どうすれば！？」

「慌テルナ。マダコチラガ数デ勝ツテイル。手近ナ敵カラ、叩キノメスンダ。全艦撃チ方始メ！」

「ラジャー、ラジャー！！！」

因みに今のこちらの艦隊の編成は、旗艦「ワーカージ・ボエズ」を始めとして、プロヴィデンス級キャリアーノデストロイヤーが八隻、ミューニフィセント級スター・フリゲートが六隻、レキュザント級ライト・デストロイヤーが一隻、ルクレハルク級バトルシップが四隻の、計二〇隻というかなりの大所帯となってしまうた。

後続の艦隊に、物は試しとこちらの編成に加わるよう伝達してみたら、嬉々として編成に加わってきた。

何故かと各艦の艦長に聞いてみたところ、「グリーヴアス將軍の艦隊に加わるより遥かにマシ」との事であった。

余程グリーヴアス將軍が嫌いらしい…。

しかし、何故か自然と全艦が「ワーカース・ボエジ」を中心に、取り囲むかのような配置に付いているのである。

こんな命令は出していない筈なのに、何時の間にかこの艦を護衛する形となってしまうている。

一体何故…？

そんな事を考えていた時、敵艦隊の新たな増援が、幾つもこの艦隊に対し攻撃を仕掛けてきた。

自分のそんな些細な疑問を思考の片隅に追いやり、一先ず最も接近してきた共和国艦隊に攻撃を開始した。

Side分離主義艦隊「エクゼクション」

俺はユニット98。

自分の乗艦 プロヴィデンス級キャリアー/デストロイヤー「エクゼクション」の艦長を任されている、一介のOOMパイロット・バトル・ドロイドだ。

俺は今、コルサントへの奇襲攻撃に参加している。

その際、司令官でもある「あの」戦術ドロイドのTO-KK1から、編成に加わるよう命令が伝達されてきた。

俺はそれを聞いた瞬間心が満たされるような、何とも言えない気持ちになった。

ドロイドの俺が「心が満たされる」なんて可笑しいかもしれない。しかし今の気持ちを当て嵌めるなら、それがピッタリであると思う。

これが「嬉しい」というものなのかもしれない。

グリーヴァス将軍が同じような事を言っても、不満しか口にしなかっただろう。

俺は以前、とある作戦に参加していた時にヘマをしてしまい、危うくグリーヴァス将軍に解体される所だった。

しかし、あの戦術ドロイドであるT O - K K 1が寸での所で間に入り、俺にチャンスを与えてくれた。

俺はあの人によって救われたのだ。

今、あの人が乗っている「ワーカーズ・ボエジ」を取り囲むように護衛している戦艦の艦長達も、皆似たような経歴を持っている。

そんな事を考えていた時、目の前に敵の増援が出現し、艦隊に攻撃を仕掛けてきた。

旗艦からは「向かってくる敵を撃破せよ」としか命令がなかった。普通なら細かい内容をもう少し聞く等するのだが、今の自分にはそれだけで十分過ぎるような命令だった。

すぐに目の前の敵に全力射撃を行い、敵艦に相当量の火力を浴びせた。

その間に次々と敵の増援が現れてきたが、そんな事は気にならなかった。

自分がドロイドだというのもある。しかし、それとは別な思いが生まれていたのも事実であった。

今度は、あの人を助ける番だ。

第八話 コルサント市内（3）（前書き）

今回は急展開です。

第八話 コルサント市内（3）

Sideコルサント市内へ共和国艦隊司令部
ドゴオオオオオオン！！！！

爆発音が響き、艦隊司令部を大きく揺るがせた。

その衝撃で殆どの司令部要員は大きく揺さぶられ、何人かは転倒し、軽傷を負っていた。

爆発が起き、その周囲が破壊されていく音が聞こえてくる度に、ここにもコンソール等といった機械類や人員に何かしらの被害が及んでいた。

「クッ……！軍曹、通信はまだ直らんのか！？」

「も、もう少し待って下さい！あと少しで通信が回復します……！」

「とにかく急げ！ゲート正面まで敵が向かってきてるんだ……！早くしないと、ここに雪崩込んでくるぞ……！」

「イ、イエス・サー……！」

ドゴオオオオオオオン！！！！

また爆発が聞こえてきた。

司令部要員の一人であるマッキマン將軍は、外の様子を映し出すカメラに目をやった。

そこには何者にも恐れる事を知らない、無慈悲な大量殺戮兵器が次

々とこちらに向かってくるのが見えていた。

司令部内では全ての隔壁を封鎖・溶接し、敵の侵入を防いでいた。シールドも展開させていたが、敵の相次ぐ攻撃によって出力が大幅に低下してしまい、本来のその意味をあまり成さなくなってしまう。

対空砲も全力射撃を行なっているが、敵のファイターの数膨大であるのと、最初の攻撃で三分の一が破壊されている為、その成果は思った程挙がっていないのが現状であった。

迎撃の為のファイターも出撃させたが、敵のその数に圧倒され、半数以上が撃墜されてしまっている。今飛んでいるファイターは、必死で逃げ惑っているといっても過言ではなかった。

唯一の救いといっては可笑しいが、上陸艇の着陸している場所が司令部の真正面だったという事、そしてMTT（大型兵員トランスポート）が無かった事だ。

普通なら司令部の屋根辺りに強行着陸し、そこをこじ開けて侵入してくるか、若しくはもう破壊されている箇所からそのまま入り込んでくるかである。しかし、ここを襲っている敵部隊は、態々真正面から向かってきているのだ。

MTTも極めて頑強な前面装甲を有しており、盾代わりと同時に、しばしば強行突破する際の先兵として使用されていた。MTTを建物や壁に激突させ、敵の施設内にバトル・ドロイドの部隊を直接投入する事が出来る。ナプーの戦いでもこの戦略が実践され、奇襲によって多くの成果を挙げる事が出来た。

しかし広大な平原等とは違い、今回のような都市部での狭い道では

身動きが取れない為に馬鹿でかいMTTを使用しないというのは分かるが、何故上陸艇を態々真正面に着陸させているのか？

これを可笑しいと思った人間は何人もいた筈だが、その思いを吹き飛ばすかのように敵は発砲してきているのが見えていた。

幾度も前線の後退を余儀なくされており、もう既に敵が最終防衛ラインまで接近してきていた。

今度前線を突破されたら、敵が司令部内に雪崩込んでくる事は明白である。

すぐに彼は残存部隊に命令を下した。

「全部隊に告ぐ、全部隊に告ぐ！！敵は真正面から向かってきている！直ちに敵部隊に対し攻撃せよ！！決して侵入を許すな！！何としても入り口付近で止めるんだ！！ここを抑えられたら我々だけじゃない！艦隊全てがお終いだぞ！！」

そして再びカメラに目をやると、侵攻してきた敵に反撃を始めたクローン部隊と防衛用として配備されていたAT-TE、そして大量のバトル・ドロイドとそれに交じったATTが多数映し出されていた。

次の瞬間に映し出されたものは、双方のブラスターやレーザー・キヤノンが入り乱れるものだったが、それも流れ弾にカメラが破壊され、映らなくなってしまった。

彼と、そこにいた全ての人員は、爆発音とそれにより生じた振動を感じながら、思わず扉に目をやっていた。

S i d e 艦隊司令部正面ゲート

『全部隊に告ぐ、全部隊に告ぐ！！敵は真正面から向かってきている！直ちに敵部隊に対し攻撃せよ！！決して敵の侵入を許すな！！何としても入り口付近で止めるんだ！！ここを抑えられたら我々だけじゃない！共和国艦隊全てがお終いだ！！』

「チクシヨウ…」

傷だらけの一人のクローン兵がそう呟くと、それに答えるかのように無数のバトル・ドロイドからのレーザーが降り注いだ。

すぐに彼とその兄弟達は、ブラスターによる返答を行った。

艦隊司令部にいたクローン部隊は、防衛ラインを幾度も突破され、ここ艦隊司令部の正面ゲートに最終防衛ラインを張る事態にまでなっ
てしまっていた。

上等兵の彼は、残っている兄弟達を集め、ここに陣を貼っていたのだ。

「いいか、皆！！ここで何としても食い止めるんだ！！共和国だけじゃない、他の兄弟達の為にも頑張るんだ！！」

「「「「「サー・イエス・サー！！！！」」」」」

彼等の士気は軒昂だった。しかしそれでも上陸艇は次々と着陸して部隊を送り込み、そして吐き出されたバトル・ドロイド達は何の躊躇もなく前進してきているのだ。

その姿は、見た者にある種の恐怖を感じさせた。

またコルサントの空では、分離主義勢力の戦闘機や爆撃機、上陸艇が所狭と乱舞し、その間をARC-170スターファイターや、それに混じって一般的にジェダイ・スターファイターと呼ばれるイータ2・アクティス級ライト・インターセプターが飛んでいた。

今の所、空でも分離主義勢力側が有利であった。

しかしジェダイが操るファイターは、その卓越した技量によって難なく敵を回避し、逆に敵を撃墜するという離れ技を見せている。

しかしクローン達はそうは行かなかった。いくら専門的な技術を持つてしても、現時点での物量の差を埋めるまでには至らなかったのだ。

今も数機のARC-170スターファイターが分離主義勢力のファイターに追い掛け回されていた。

それぞれのスターファイターの船尾砲手が、必死に背面に搭載された後方キャノンを操作し敵を撃ち落そうとしていたが、無数のヴァルチャー・ドロイドはそれを嘲笑うかのように避け、スターファイターを撃ち落としていった。

撃ち落された一機がこちらに突っ込んでくるのが見え、慌てて彼等は隠れようとしたが運良く　ファイターの搭乗員にとっては運悪く　敵の進撃路に墜落した。

敵に向かって墜ちたのと、墜ちた時の爆発の衝撃によって、幾許か敵を後退させる事が出来たのは全く以て皮肉でしかなかった。

しかし、その残骸ですら乗り越え向かってくるバトル・ドロイド達を見て、思わず背中に流れる冷たい汗を感じた。

S i d e 共和国艦隊ドック

「第三小隊は左より回りこめ！残りは敵の正面に当たれ！！」

「誰か、弾！弾持っていないか！！」

「うつ…誰か…誰か、助、け…て…くれ…」

「衛生兵、衛生兵……！！」

「ファイターは一体何をやってるんだ！？」

ここ艦隊ドックでも、阿鼻叫喚の有様であつた。

修理途中だった艦は、本来その羽根を休める筈が奇襲によって止めを刺され、また無事だった艦も不意を突かれた為、半数近くが沈んでしまっている。

そして、新たな作戦の為に多くの物資を集められていた事も災いした。戦艦だけでなくこの物資にも襲いかかったのだ。

他のハイエナ・ボマー同様に、この無慈悲な分離主義勢力の爆撃機は、プロトン爆弾をこれら兵士達の必要な物の真上に投下していた。

そして、それが爆発した時
更なる地獄を作り出したのである。

数多くの武器・弾薬が誘爆を起こし、その余波は近辺に存在していたシャトルや、クローン兵達を飲み込んでいった。

それは穴埋めの為に集められた新兵達も例外ではなかった。彼等は戦場を知らないまま、この世から消え去ってしまったのだ。

「ペレズ！マーロー！！」

それを目の当たりにした、同じ分隊のジャスティーは悲鳴のような叫び声を上げた。

そこには、今しがた吹き飛ばされた二人の壊れたヘルメットが転がっていた。

彼と今吹き飛ばされた二人は、生まれ故郷のカミーノから常に一緒

だったのだ。それが目の前で爆風と共に消えてしまった。
彼はその事が信じられず、彼はレーザーが飛び交う中で茫然自失と
なってしまった。

「そん…な、そん、な…。今、め…目の、前に…いたのに…」

「何やってるんだ、馬鹿!!」

そんな彼を一人のクローン兵が物陰に引きずり込んだ。次の瞬間、
彼らが立っていた場所を爆風が襲った。

「すっかりしろ、新兵^{ルキ}!! もうお前の兄弟はいない!! いいか、も
ういないんだ!! ボサツとしてないで、お前が何をすべきか、それ
を考えろ!! お前が行動に移さなけりゃ、他の兄弟も殺られちゃう
んだ!! 早く動け!!」

今しがた自分を物陰に引きずり込んだクローン兵 軍曹だ が、
自分に向かつて叫ぶのを、未だに呆然としたまま聞いていた。
しかし今まで呆然としていた彼は、叱咤された事によって何とかブ
ラスター・ライフルを手に、迫り来るバトル・ドロイド達を迎え撃
ち始めた。

そのすぐ上空を、傷だらけになりながらも数隻の生き残っていた戦艦が、必死に対空砲火を作りつつ、この場からの脱出を試みていたのが確認出来た。

本来ならば、市街のすぐ傍で戦艦が発砲する事はある得ないものであった。もしたった一発でも市街のいずれかに当たればそれだけで大惨事だからである。

しかし、この時は市街でも 戦艦程の火力ではないが 発砲が相次いでいた。それはクローン駐屯部隊とバトル・ドロイドの大群とのものであった。

だが、それを目敏く察知したハイエナ・ボマーやヴァルチャードロイドの一群が、その生き残りの艦艇に止めを刺そうと殺到した。

それを艦艇群が対空砲火で必死に阻止しようと対空砲火の嵐を形成した。

しかし、この時一機のボマーがその対空砲火によって片翼を破壊され、プロトン爆弾を投弾せずに、錐揉み状態で一隻のヴェネター級スター・デストロイヤーの艦橋に 突っ込んだ。

ボマーを迎撃したスター・デストロイヤーは、自分が仕える主人達全員を失い、そして自分を操るべく使われていた全ての機器を喪った結果、その進路をつい今しがた出航したドックへと変針した。

そうして、更なる混沌と破滅を作り出していったのである。

落ちてきたその巨艦によつて、敵の部隊や上陸艇だけでなく、生き残ったクローン部隊にもその余波が襲いかかったのだ。

他の艦艇は何とか脱出したが、出航する前より傷だらけになってしまっていた。

しかし他に、奇跡的に無傷に近い数隻の艦艇が脱出しようとしていた。

そこにいたクローン部隊の殆どが、「また殺られる」と信じて疑わなかった。なかった。

だがなんと、その数隻は傷を負わないまま、そのままコルサント上空へと脱出する事に成功したのである。

これを見ていた何人かのクローン兵は、思わず雄叫びを上げていた。

今しがた脱出した艦艇の旗艦のを務めるスター・デストロイヤーの名前は「ホープ」であった。

それを見た全てのクローン部隊はこう思っていた。

俺達の、共和国の「ホープ」（希望）になってくれと。

しかし、それを全て忘れさせるかのような一報が共和国軍の随所に伝達された。

パルパティーン議長が誘拐された。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8349u/>

スターウォーズ クローン・ウォーズ とある戦術ドロイドの一生...？

2011年11月6日13時17分発行